

# 単発シリーズ

あいとうーん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

pixivとハーメルンで二次創作投稿始めたものです。長編は手がまだ出す自信が無いので単発シリーズで頑張ります！

良ければ読んでくださると嬉しいです！

# 目次

アルバイト八幡	1
ママ幡は、ストーカー(息子の)	11

## アルバイト八幡

「7番テーブル、オムライス、

5番テーブル、カレーライス！

お願いします！」

「、りよーかい」

そこそこに埋まっている客席、キビキビとしたフロアの女子高生。そして料理を作る俺。

そう、この俺比企谷八幡は絶賛アルバイト中だ。さんざん、働きたくないと誓った高校時代、いや、まだ俺も高校生だけどな？

アルバイトに至るまでいろんな過程があった、だが結果的にこうやってアルバイトに勤しんでいる所存だ。

働きたくなったとか、そういう訳じゃない。

単純に金が欲しいという気持ちもある、あとはプレゼントを買いたいヤツらのため、それとおまけで社会勉強かな、笑

俺が働いてるこの店は家から30分程にある、自営業の喫茶店で店長と母が仲良く

人手が足りないとの言うことでここで働くことになった。

まあ、明らかにフロア向けじゃねえから料理作ってる訳だが。しかし、これがなかなかあつていたのか意外と楽しい。

ふむ、そろそろかな。

いい感じに焼けた卵を皿に盛っていた、ケチャップライスにのせデミグラスをかける、

そしたらホワイトソースを垂らしパセリ缶をひと振りかければ出来上がり。

自分の腕を自慢する訳では無いが、なかなかよくできてる。シンプルな一品、うむ、シンプルっていいよね笑

「7番テーブル、オムライス出来たぞ、西村」

出来上がった料理を出しながら、フロアの人に声をかける。

「比企谷さん、お料理ありがとうございます！」

「、今日も元気がいいな。」

「そういう比企谷さんは、いつもだるそうにしていますけどね？」

「俺のことはほっとけ」

「はいはい、ではお料理持っていきますね」

「おう」

皆さんは、今の光景をご覧いただけただろうか？そう、俺はバイト先ではコミュ障になっていないのである！

ふつ、今のように軽口を言い合えるぐらいには仲がいい。どうだ？すごかるお！

いや、最初はもちろんコミュ障全力だったけどね？ただ、仕事に慣れてきたのと周りの人がいい人だったからな。西村然り、ほかの人然りつてな。

ちなみに俺ができるのはキッチンのこと全般、フロアのこととは全くできず唯一できるのはレジくらいだな。ま、そうそうレジに行く事態にはならんけどな。

平日の月、水、土にいつもシフトを入れてる。そこそこ給料は貰ってるし、働く環境も悪くない、むしろ恵まれたバイト環境とも言える。

そろそろカレーライス作るか、。

ちなみにこの店ではカレーは朝作るスタイルになってる、だから正直1番早く出せるのだからあえてそうはしない。

お客さんが、注文を少ししたちお腹すいたなー、料理まだかなーと思ったところで出すのがベストタイミング。

ま、忙しい時はそんなことする余裕ないけどな。平日の夜、人があまり来てないからこそできることだ。

そもそも、この店はめっちゃめっちゃ人が来るといふ訳では無い。どちらかと言えば昼メインな店のため夜はぼちぼちと言ったところ。

だから、基本フロア1人のキッチン1人って感じだな。つまり、西村と俺の2人ということだ。必然的に仲良くもなる。

こんな俺と仲良くしてくれて、まじ感謝の極みである。

カレーライスも出し終わってそんなことを考えていると、西村が

帰ってきた。

「んー、やっぱり平日の夜はお客さんそんなに来ませんねー」

「まあ、昼メインの店だしな」

「いや、まあそうなんですけどね。」

比企谷さんとおしゃべりできるから、私的には全然OKなんですけどねー」

「おいおい、嬉しい事言ってくれるじゃないか。」

「俺も西村と喋るのはいいけどな」

「……………」

「いや何故そこで黙る。」

「なんだよ」

「いや、なんか比企谷さんが素直にそう言ってくれて嬉しいというか、ちよっとドキツとしちゃったなーって」

「まあ、俺の唯一の後輩だしな」

この店、従業員は多くないしアルバイト募集も何故かしていないため入ってから基本的に後輩などは現れなかった。常に俺が下っ端笑

店長から聞いた話だと、この店の常連でアルバイトしたいみたいなお話をしたから店長が勧誘したらしいけどな。

「まあ、でも比企谷さんがこの店で働いてて良かったです。最初はえっ、こんな人がって思いましたけど笑」

「おい、えっは余計だろーが」

「すいませんって、でも良かったって思ったのはほんとーですよ。フロアとキッチンなんで教えてもらうことはあんまりないですけど、

同年代の人は比企谷さんだけだし、

何より、比企谷さん優しいですもん。」

素直に照れた。

「……………」

「あれ、もしかして比企谷さん照れてるんですかー？」にやにや

あのニヤニヤ顔が憎たらしい、何より顔立ちが整ってるからニヤニ

ヤ顔も様になってるのがうぜえ。

「うっせ」

「比企谷さんって、何気にいじりがありますよね。なんか、楽しくなります。」

「年上いじってんじやねえよ」

「いじられる要素持つてる側が悪いんですよ」

「なにそれ理不尽」

「ま、いじるのは比企谷さんにだけって心に決めてますけどね！」

「なにその、無駄な誓い。まじいらねえ」

ちりーん

「ほら、お客さんだ行ってこい」

「分かってますよー！」

ちなみに店のドアは2重になっていて、最初ドアを開けてそこでちりーんと音が鳴る、そして更にドアを開けて店の中と言った感じなのだ、もつと言うならキッチンからドアはよく見える。

「いらつしやいませ！お客様は何名様でしょうか？」

「1人ね」

、、、 いや、まじか。何故ここに雪ノ下が。

幸いキッチンの方は見ていなかったみたいだ。なぜここに来たのかわからないが、客は客きちんと作らなければ。それにしてもやりにくいなあ。

、、、 まずいとか、いわないよね？

案内の終わった、西村が帰ってきた。

「綺麗な人でしたね〜」

「そ、そうか？」

「いや、興味ないふりしながらめっちゃお客さん見てるじゃないですか笑

あーいう人が好みなんですか？」

少し不機嫌そうに言う西村。何故だ。

「い、いやそーいわけじやないけどな？」

ただ、なんだかなーつとな?!」

「…………… 私も髪の毛伸ばそうかな」

「え？なんて？聞こえなかったわ」

「なんでもないですよ、男の人って綺麗だったらいいなんだなーって比企谷さんが鼻の下伸びてるの見て思ってた」

「違う、それは誤解だ。確かに男はそうだが俺は違う！、、、つもりだ。」

「そんなんじゃないよ、あれだあれ。」

「同じ学校のやつなんだよあいつ、それで少し驚いただけだ。」

「ん？そーなんですか？なんだ！鼻の下伸ばしてんじゃないやねえよって思っちゃったじゃないですか！」

「いや、こえーよ」

「辛辣すぎんだろ、バイト先に知り合い来たらなんかやりずれえだろ？それだよそれ」

「ほんとですかねー？そもそも、比企谷さんって知り合いそんなに多くないですよね？」

「いや、なかなか心を抉ってくるな。いや事実だけでも！」

「すいません」

「おっと、雪ノ下がご注文のようだ。頼む！凝ったものは来ないでくれ！心の底からそう願う。」

「…………… ふーん、怪しいなあ」小声

「ほら西村オーダー行ってこい」

「ふむ、、、 すいません、なんか頭痛くなってきたオーダー行けそうにないのでオーダー取ってきてもらっていいですか？あー頭痛い、痛い」

「…………… は？」

「いやいやいやいやいやいや、嘘つくなよ！」

「あー、これ無理ですね。オーダー取りに行くなど頭が頭痛で示します。はやく言ってきてください比企谷さん。お客さん待ってますよー！」

「そーやって、頭を抑えて俺に早く行けと催促してくる。あの野郎、



絶対許さねえ。

心を無にするんだ俺！

幸いオーダーの取り方は辛うじでわかる。

雪ノ下に近づく度にドキドキが止まらねえ！

落ち着け、落ち着け俺。

「お待たせしました、オーダーはどちらになさいますか？」

「そうね、、、、、、え？」

うん、わかるよ？その気持ち。俺もさつきまでそんな気持ちだったから！

それから見つめ合うこと、10秒。

何故か後ろを咳をしながら通っていく西村のおかげで世界が動き出す俺と雪ノ下。

いや、頭痛いんじゃないのかよ。

「ふう、取り乱してしまっただわ／＼／＼」

でしようね。

「いや、なんかすまん」

「あなたアルバイトしてたのね。だから、月水は部活休みだったのかしら？」

「まあ、そーいうことになるな。あの部活に入る前からしてたからな。休みはもらつとこうと持って。」

「いえ、休みをとっているのは全然いいの。この日は休むと事前に言われていることですし。ただ、あなた専業主夫めざしてなかったかしら？と思って」

「まあ、色々あるんだよ」

「そう」

「おう」

話終了、帰るか。

「じゃあな、まあゆつくりして言ってくれ」

「いえ、あの、、、、」

「ん？なんだ？」

「オーダーまだ言っていないのだけれども」

.....あ、八幡動揺してオーダーとるの忘れちゃった！てへぺろ

いやきもいな。

「あー、すまん。それで何にする？」

もう、お客様に対しての態度じゃないがそれは今更だ。

「そうね、何がオススメかしら？」

「そうだな、今日は俺が作ってるからおすすめはオムライスだな。」  
楽だからというのは内緒

「あなたが作っているのね、なら

オムちや..... オムライスにしようかしら／＼」

まだ動揺してたんすか我が部長よ。

ここはスルーしてあげるのが大人な対応なのである。

「わかった、オムライスひとつな。」

そう言つてキッチンに戻る。雪ノ下よ気にするな、それが今まで俺が味わってきた気持ちだ笑

「何か言いなさいよ、...、ばか／＼」（小声）

我が城に戻ると、そこに居たのは仁王立ちの西村。頭大丈夫なんですかね。

「頭痛いの治ったか？」

「なんだか、いい雰囲気でしたね」ムスツ

いや、話聞けよ。せっかく心配してやってんのに。

「そんなことねえだろ。ただ同じ部活だから少し話したただけだ。」

「さつきと言つてたこと違うじゃないですか！」

「いや、部活の仲間も学校の知り合いに入るから。嘘じゃないから」

「まあ、それはそーですけど。なんだか納得いかない、。」

「はいはい、俺は料理作るからテーブルの水ちゃんが入ってるかでもみとけよ」

めんどくさくなくなったら、誤魔化す。これが俺の必殺技その1。その2は特に考えていない。

「言われなくても、見てきますよー！」

さて、作りますか。いつも以上に丁寧に、スピーディーに、かつ雑にならないように完成をイメージしながら作る。

ま、何回も作ってるから失敗なんてほぼしないけどな笑

てか、さつきからこつちをガン見してる人が二人いるんですが、。

おい、雪ノ下水のコップもったまま停止してるぞ。

西村は、ちゃんと水の補充しろ。

なんとか、見られながらも失敗なく完成したオムライス。今までで1番神経使ったオムライスだったわ。

「持ってたか」

「比企谷さん、ここは私が持つていきましょう」

「頭は大丈夫なんですかねえ」

「えー？頭ですか？もうそんな昔のことは忘れちゃったね」

「おい」

「冗談ですよ！ありがとうございます！」

では、持つていってきますね〜」

全く調子のいいやつだことだ。だか憎めない、それがあいつの人柄なんだろう。

変なことしないといいんだが、。

「お待たせ致しました、オムライスになります。ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「ええ、ありがとう。その変なことを聞くのだけれどもあのキッチン  
の男とは仲が良いのかしら？」

ん？なんか話してるな。でもここからじゃ聞こえねえ。

「そーですね。いつも良くしてもらってるんです。優しいし仕事できるし、仲良くしてもらってありがとうございますってかんじてすね。」

「そ、そう、。こんな所にも伏兵がいるのね」

「ん？なんですか？」

「いえ、なんでもないわ。でもなかなか様になってるじゃないあの男

も」

「あ、分かりますか！かつこいいですよね、比企谷さん！普段ダラつと  
してるけど、料理作る時の真剣な感じがドキッとしちゃうんです！」

「そ、そうね、、、確かにかつこ、ゴホッ

いい感じかもしれないわね。」

「ふふ、誤魔化さなくてもいいですよ？何となく比企谷さんに対する  
目線でわかつちやったので。でも、比企谷さんは私のですけどね？」

「ち、ちが、、、そんなことないわ」

「まああなたがそれでいいならいいんですけどね！では、ゆつくりお  
召し上がりください」

「待ちなさい、あなた名前は？」

「西村です、西村かよ。比企谷さんをGETする女です」

「私は雪ノ下雪乃、負けないわ」

「ええ、私も負けるつもりはありません」

やっと帰ってきた、なげえよ。

「何を話してたんだ？」

「いえいえ、ちよつとした宣戦布告ですよ？」

いや、戦争でも始めるんですかねえ。この店だけ平和じゃねえじゃ  
ねえか。

「私もうかうかしてられないな〜つとね？」

「いや、何がだよ、、、。」

もうわかんねえ。

「んー、比企谷さんは気にしなくていいことですかねえ、、、今は」

「なにそれ、怖いわ」

やっぱり俺が料理持っていけばよかつたわ。

一体何があったというんだよ。

そこからは、特に何も無くダラダラと時間が過ぎた。まあだいたい  
いつもこんな感じ。

今日が予想外すぎただけだ。

ちりーんちりーん

「比企谷さーん、レジ行つてくださーい。」

「いや、フロアの仕事しろよ」

「いや、だつて雪の下さん比企谷さんだせつて目で語つてるじゃないですか笑」

「まじつすか、てかなんで雪ノ下の名前知つてんのよ。」

「まあ、そんな細かいことは気にしないでくださいよ。それより早く行かないと待たせて　ますよー」

「わーつてるよ」

行きたくねえけど、行くか。

「すまん、待たせた。オムライス1つ689円だな。」

シンプルにかつ若干急かす！なぜなら嫌な予感がするからだ。

「オムライス美味しかったわ、また来るわね。」

俺がいない時ならぜひ来てくださいと心の中で添えることは忘れない。

「おう、ありがとな。」

「それと、、、、。」

まだなんかあるのか？

「、、、ん？」

「私ここでアルバイトすることに決めたからよろしく。では、また学校で。」

言うことは言ったとばかりに、髪の毛を翻して帰っていく雪ノ下。  
「なるほど、そう来ましたか」

いや、なんでやねん

ママ幡は、ストーカー（息子の）

現在比企谷八幡の母こと私（名前はまだない）は、尾行中だ。けれどストーカーではない。

誰の尾行をしているのかというと、我が可愛い息子をだ。世間では、あんまり可愛がってない風に描かれてはいるがそれは確かに事実。表面上はな!!!

違うのよ、本当はめっちゃ可愛がりたいの！だってあの子ちよー優しいんだから!!

小さい頃なんて、ずっと小町の面倒を見てくれて本当に助かったわ！本当にできた子よ。

小町ばかりじゃなくて、お母さんにも構って!?!  
ふう、、、つい本音が、、、

だが、結局これまで上手く可愛がってやれず時だけが過ぎてしまった。もうあの子も高校生。イチャイチャ出来ないのね、、、

悲しみの極みだわ、。

まあ、それは置いといて。

今日はなんと八幡がデートらしい。

小町から聞いたのである。八幡デートかあ、誰とかなあ？お母さんじゃだめ？

と、心配もとい相手に対する嫉妬に狂った私は絶賛八幡をストー、じゃなかった尾行しているのである。

まあ、尾行中と言ってもまだ集合はしていない模様。午前10時に駅前待ち合わせという情報を頼りに私は8時からこの駅にいる。

最近寒くなってるから、結構辛い。

そして、現在時刻9時20分八幡が現れた！  
きゃー！ー！ー、八幡きたああああ？！

さすが我が息子、約束より早く来る。まじ紳士、ぎゅつとして欲しい。

あの待っている姿もまた凛々しいのである。

あー、そうそうこれこれ。あの腕時計見る姿とかちよーかつこよくない??!

うちの息子はかつこいい (結論)

あーだこーだ、八幡鑑賞会を初めて20分が立った頃、八幡に近寄る女が現れた。

黒髪ロングでスレンダー、胸はないがとても綺麗な女の子。え、あんな綺麗な子とデートなの?!

しかもなんか、めっちゃ仲良さそうだし。

別に嫉妬とかじゃないし、八幡と仲良くしてて羨ましいとかじゃないし。(ーωー)ふい

てか、あれだし。黒髪ロングとか若干私とかぶるからその路線は私がいれば問題ないし。私でもう八幡は充分だし。

おっと、危ない。思考の闇に飲まれていたら見失うところだった。見失わないようにしなければ。

ふむ、今日のデートプランは一応把握しているけれど最初は映画館なのね。定番ねえ。

暗闇の中で男女二人、けしからん。

映画館までの移動は特に何事もなく、ただ電車にかたんことん、かたんことん揺られた。

眠い、寝そう。

そして映画館に到着。ふむふむ、映画館ねえ。八幡はまだ小さかった頃1回だけ一緒に行ったことがあるわね。

ウルトラマンの映画だったかしら、はしやいでた八幡を思い出すと可愛くて死ねるわね。

ふむふむ、今はドラ○もんと恋愛映画ねえ。

ここはドラ○もんにしなさい八幡。八幡には恋愛はやすぎるのよ!!

そんな私の願いは届かず、恋愛映画を見る模様。私も買わなければ!

よく考えると、1人で恋愛映画ってなんか寂しいわね、……。

ほおほお、八幡達は前の方に座るのね。

私はFの15だからちようど見えるわね!!

映画館に来る度に思うのだけれども、違法ダウンロードは駄目みたいな言ってる顔がカメラになってたりする人達の映像めっちゃ好きなのよねえ。

ああいうのなんか面白くて好きなの。わかる人っているかしら？

とゆーか、映画館が始まって思ったことが2つ。1つは、この映画の面白みのなさ。なんだろう、意外性がないというか、一言でまとめると普通って感じ。



そして重要なのが2つ目。映画館暗くなるから、八幡たちがみえないんですけどおおおおお!!??

いや、良く考えれば普通なんだけどね？

これは大誤算だったなあ。まあ、周りに人がいる状況で変なことなんてしないでしょ。

大人しく映画見ますかあ。

そして無事映画は終了。

最近の映画はとりあえずどっちか殺しとけばいい感じあるからあんまりすぎじゃないのよねえ。

まあ、映画の感想なんてどうでもいいけど笑  
さてさて、メモメモと。

メモ

- ・そもそも映画館では尾行不可
- ・変なことはしていない模様
- ・映画の完成度は低め

よし、これでOK

さて次わつと、お昼ご飯みたいね。

映画観に行ったあとに、ご飯に行ってそこで会話を弾ませるとい算段か。

とゆーか、これ計画したの小町ね？私に情報をリークできたのもそれなら納得だわ。

あーこのお店あれね、先月オープンしたパスタとサラダがうりのおしやれな雰囲気の人気のところかあ。

まあ、ここ結構大きなショッピングモールだし映画からご飯から色々あるから、デートするにはもってこいの場所ではあるわよねえ。

ちりーん

「いらつしやいませ、お客様は何名様でしょうか？」

見りや分かるでしょうが、1人だよ悪いか

「1人です」

「かしこまりました、ではあちらの席へどうぞ！」

そう言えば今更ではあるけれども、私八幡のこと尾行してるのバレてないよね？本人達に。

変装とかあんまりしてないから普通にばれそうなんだけど笑

ま、バレたら八幡さらって帰っちゃお。

てへ

あ、八幡カルボナーラ頼んでる。

私もそれにしよ。

尾行開始からかれこれ4時間ほど経つが、仲の良さがひしひしと伝わってくる。

これが高校生のプレッシャーなのか!?

とゆうか、素直に尾行楽しい笑

八幡の尾行が趣味になりそうなレベル。

だが、ここで事件発生!!

なんと、あの黒髪ロングの子が八幡にはアーンをしているではないか!

「まだはやいよ君たち！ここは何としてでも阻止せねば!!」

「あー、お水こぼしちゃったア。てへぺろ」ぼしゃっ

自分で言つといてあざとすぎて死にたくなつたが、これも息子を黒髪ロングの女の魔の手から逃がすため。仕方の無い犠牲だったのだ、。。。

「お客様、大丈夫でしょうか？お召し物にかかつてはいませんか？」

私の声に気づいた、優しい店員さんが対応してくれる。

「ごめんなさい、店員さん手間を増やしてしまって。また来るから許してください。」

「なんか、今母親の声が聞こえた気がするんだが、、、、？どー思う雪ノ下？」

「私はあなたのお母様の声を聞いたことがないわよ。それより私のペロンチーノも美味しいでしょう？／＼」

「お、おう」

な、なにいいいいいい。アーンが終わっているだと、、、、。

私が店員さんに迷惑をかけ更には自分の尊厳を捨ててまではなつた究極のコツプ倒しはスルーか!?

でも、素直に母親の声に気づいてくれたのは嬉しい（満足

それから3時程まで、八幡と黒髪ロングの子は語っていたがあらかた語り尽くしたのだろう。席を立つようだ。

さて、私もメモつたら行きますか。

メモ

- ・黒髪ロングの子が私の八幡にアーンをしていた
- ・止めようとした私の技は華麗にスルー
- ・あとカルボナーラ美味しい

ちなみに、会計は八幡が払っていた。さすが我が息子まじ紳士。

このあとの予定はこまち情報によると、特に何も無いらしい。帰宅となるらしいが、どーやらまだ帰らないみたいね。

2人が歩いて言った先は、ゲームセンター。ゲーセンかあ、学生の頃はよくいつてたなあ。よくゾンビ殺してた。

しかし、ゾンビゲームはスルーする模様。まあそりやそーだ。見た感じ特になにかしたかったわけじゃないみたいね。

ん？黒髪の子クレインゲームの前で立ち止まってる？何か見てるのかしら？

どーやら、黒髪の子はクレインゲームの中のお人形さんが欲しいらしい。デイスティニーのキャラクターだった気がするのだけど、名前はよく知らない。

するとずっと見ていたのに八幡が気づいたのか、取ってあげようとしてるみたいだ。

だ、ダメよ八幡！そのお人形さんとはいけない！！

取ってしまったら、、取ってしまったらその女が堕ちる！！！！（確信

しかし残酷なことに八幡はこの手のゲームは得意のようだ、さすが

我が息子（定期

そして、ゲッツされた目つきの悪いパンダは黒髪の子の手の中に、、、。

いや、あの顔みてよ。何よあの嬉しみを噛み締めてる顔。絶対人形が取れたうれしみだけじゃないでしょーが。

しつかりメモしなければ！

メモ

- ・ゾンビゲームはスルー
- ・八幡はクレーンゲームが得意
- ・黒髪ロングの子が堕ちた
- ・私の八幡にデレデレすんな

どーやら、今日はもう帰るようね。八幡は送っていくみたい。さすがにそこまで尾行はやめときましようか。そこまでやるとストーリーよ私!!↑もう既に圧倒的ストーリー

それにしても、今日は色々あったわねえ。

八幡のこといっぱい知れて充実した1日だったわ。たまにはこういうのもいいわね。

「ママなにしてんの、、、？」

「あら、小町じゃない。少しショッピングモールを散歩してただけよ」

バレてはいけない。これは私だけの極秘任務なのだから！情報リークは有難かったが尾行までは言っていない！だからバレてはいはず！

「いや、お兄ちゃんのことストーリーカーしてたのバレバレだから。手帳にめっちゃメモ貼ってあるから。」

あ、バレちゃった♡

「小町の情報ほんとに助かったよ、リークありがとね？」

ま、リークなんてなくても八幡への愛でなんとかあったけどね！

(謎。パワー)

「……………お兄ちゃん、なんかごめん、。」